

令和3年度 第3回 不登校児童生徒等の学びの継続に関する懇談会（オンライン）
意見交換要旨

- 1 日時 令和4年2月14日（月） 10:00～12:00
- 2 場所 長野県庁西庁舎110号会議室（web開催）
- 3 出席者 別紙「構成員名簿」参照
- 4 内容
 - (1) 開会
 - (2) あいさつ（県民文化部こども若者局長 野中 祥子）
 - (3) 報告事項
 - ①委託事業の取組
 - ②不登校支援の仕組みづくりについて意見交換
 - (4) 意見交換
 - ①「不登校児童生徒の学びのサポートガイド」Vol. 1（案）について
 - ②意見交換
 - (5) まとめ
 - (6) あいさつ（教育次長 今井 義明）
 - (7) 連絡事項
 - (8) 閉会

【意見交換 要旨】

- 荒井座長： 4つの自治体より今年度の委託事業について報告をいただいた。「不登校支援コーディネーターの配置の在り方」、「全体をコーディネートしていく教育委員会における体制整備のあり方」の2つの論点について皆様からご意見をいただきたい。また必要に応じ、委託事業についても発言をお願いしたい。
発表いただいた4市町村に対しご質問等あるか。
- 北澤委員： 小諸市にお聞きしたい。コーディネーターを4名配置しているとのことであるが、業務上の役割分担等があるのかどうか教えていただきたい。
- 小諸市担当者： 男性1名、女性3名の計4名にて構成している。子どもにより様々であるが、家庭訪問の際には女性が支援に入る方が受け入れてもらいやすい。支援を行う子どもに合わせ、情報共有を行いながら対応している。
- 荒井座長： それでは1つ目の論点「不登校支援コーディネーターの配置の在り方」について意見交換をお願いしたい。4つの自治体のうち、小諸市が4名のコーディネーターを配置。安曇野市、松川町、千曲市は1名配置となっている。また配置場所に関しては、安曇野市のように教育委員会の中に配置するケースもあれば、千曲市のように学校内の子どもの居場所において対応しているケース等、様々なパターンがある。配置の在り方についてご意見をいただきたい。また委託事業自治体の皆様からも、ポイントになりそうなことがあればご

発言いただきたい。

小山委員 : 各自治体の取組は大変参考となりありがたい。子どもたちが抱えている課題に対し、より多くの支援者が関わるのが大事だろうと考えている。小諸市のように複数のコーディネーターが当事者の課題に向き合い、子どもや家庭と関わり支援していくことが大事だと考える。マンパワーを増やすことの難しさがあるが、修正を行いながら実績を上げ、定期的に報告会にて情報を共有させていただけると大変ありがたい。

安曇野市の取組を示した資料の図に関し、学校と教育支援センターとの関係を示す矢印の繋がりがあった方が良く考える。中学卒業後の進路に関し、最終的には学校が主体となり本人や保護者と共有していく立場となる。「学校」を強調するわけではないが、関係を作りながらの学校との連携が重要だと考える。

また、子どもや家庭との関係づくりの難しさを感じている。関係ができないと学習に向かう次のステップに進めない。小諸市では体験活動を積極的に取り入れているといった報告があったが、時間をかけ丁寧に積み上げていくことが大事であると考えている。東御市では、映画館を活用した「うえだこどもシネマクラブ」という取組、公民館の子ども講座への参加、大学生ボランティアと関係づくり等により関係づくりが少しずつ進んでいる。

荒井座長 : 報告いただいた4自治体の取組に関して概括させていただく。大きく分け3つとなる。成果や課題は共通する部分もあれば個別のものもあるが、引き続き共通課題を共有しながら取り組んでいただきたいと考え、次のようにまとめた。

1つ目が、「不登校の子どもに対するケアに関する条件整備」である。ここで言う条件整備にはいくつかあるが、①として「タブレットの貸し出し等々がスムーズにいつているのか」である。利用の方法やWi-Fiの対応も含めたものとなる。②として「フリースクール等々の関係における送迎」である。課題となっている自治体が多い中、送迎サービスを今年度より始めた自治体もあった。今後、重要なポイントになると考える。③として「町の施設、自治体内の施設利用のあり方」である。フリースクール等での利用の制限がある自治体がある一方、自治体の判断により利用がスムーズに進んでいる報告もいただいた。ぜひこの部分も深めたい部分だと考える。④として「体験活動に関する開拓と継続性の担保」と言える。いくつかの自治体ではこの体験活動の「開拓」の部分についてご尽力いただいたところである一方、この役割を不登校支援コーディネーターが担うには困難な場合もあるのではないかと個人的には感じている。教育委員会が主体となり様々な資源を開拓していく必要があると思うが、今後も継続する・担保するという意味では、協力いただける施設や場所に対し、何を根拠にして協力体制を整えていくか考える必要がある。連携協定等、様々な方法があると思うが、継続性を担保するために模索していただきたいと考える。⑤として「フリースクールや民間施設等とのガイドラインの作成」である。安曇野市は既に作成済みであることを報告いただいたが、作成したいが未作成であったり、その内容がどういったものなのか知りたいといった関心は多くの自治体でもあるのではないかと思う。同じ悩みや難しさを抱える自治体として情報共有いただきたいと考える。以上が大きな1つ目の「条件整備」における今後の共通課題であると考えている。

2つ目が「不登校支援コーディネーターと他者との協力関係のあり方」である。安曇野市ではスクールソーシャルワーカーとの連携ということで、職種の専門性の部分での連携があったと報告いただいた。教育委員会内部での不登校支援コーディネーターとの関係や、学校関係者との関係等、不登校支援コーディネーターが孤立することのないよう情報共有の仕組み作りを進めていく必要がどの自治体にもある。

そして3つ目が「学校との情報共有のあり方」である。様々な体験活動を通して得た学びというものをごどのように評価していくのか、あるいは評価すべきではないと判断するのか、本人が求めたとするならば、大人として向き合っていく必要がある課題であると考え。評価をどうするのかといったことについては、この後検討するサポートガイドにも関係するが、出席扱いの次に控える大きな課題となる。「学び」をごどのように評価し客観的なものとして記していくのか、今年度は具体的に検討が進まなかった部分である。悩ましい部分があると思うが、試行錯誤を繰り返しながら次年度以降焦点化していくべき部分であると考え。

今回の報告では、自治体によって配置の仕方や教育委員会の支援の仕方に多様性があった。情報共有をしていく場合は、多くの市町村が求めていると考える。情報交換会、セミナー等を含め、自治体が学べる機会を増やしていただきたいと感じている。

続いて今年度作成した「不登校児童生徒の学びのサポートガイド vol 1」に関し、それぞれのセクションごとに、ご意見や気になる点についてご指摘いただきたい。

心の支援課より「不登校児童生徒の学びのサポートガイド vol 1」について説明。

荒井座長 : 残りの時間を使い「はばたき（不登校児童生徒の学びのサポートガイド vol 1）」についてのご意見をいただきたい。また共通認識として、あくまで vol 1 であるということをご理解いただきたい。もっと違う項目を加えるべき等のご意見については、vol 2 に向けて申し送る形にしていきたい。

冒頭のタイトル「はばたき」に関して、「不登校児童生徒の学びのサポートガイド」というよりは「はばたき」という形で流通していくことになるかと考える。広報等のあり方については後ほどご相談させていただきたい。

続いて1ページ目の「はじめに」の部分に関し確認する。学校からの視点ではなく、不登校児童生徒に向き合う大人、様々な主体からガイドの役目を果たすという思いを込めて作成したことを記載した。

近藤委員 : 「不登校児童生徒」という言葉はなるべく避けたい。最後の段落であるが、「不登校児童生徒の学びのサポートガイド」（通称：はばたき）の通称「はばたき」を前に出したい。「はばたき」（不登校児童生徒の学びのサポートガイド）のような形にした方が良いだろうと考える。

荒井座長 : 通称を外し、「はばたき」を前に出し、後半部分に括弧等でサポートガイドのことを書いてはどうかというご提案をいただいた。心の支援課あるいは長野県教委が出している資

料冊子等と比べていただきながら、事務局と相談し判断していきたい。

熊谷委員 : 日頃より各地域において、子どもたちのためにご支援いただいていることに感謝申し上げます。

3段落目の「不登校児童生徒に向き合う大人」の文言に続く括弧内に「地域」を入れたいとする。不登校児童生徒に対する支援において、地域の見方も変わる必要がある。また、学校の社会見学等を含め様々な体験学習における地域との連携が、子どもたちにとって尊い体験となり重要な支援となる。

荒井座長 : 括弧内について、「家庭、学校、地域、民間施設」という順で記載する形が良いだろうと考える。

続いて「1 不登校に対する理解について」である。不登校は子どもからの SOS のサインであるといったことを記載している点が前回との違いになる。他に図やコメント等を入れた。ご意見をいただきたい。

この部分では、不登校に対する本質的な理解が進んでいないこと、当事者である子どものみならず家庭にも苦しい状況があることの認識を深めたいと考え記載している。

荒井座長 : 続いて「2 支援の基本的な理念」である。前回の提案から文言を修正している。あくまで自分らしく学ぶということに焦点を当て支援をしていこうということで、この「はばたき」全体を貫くコンセプトを記載している。2段落目の「全ての大人」に続く括弧内は、先ほどいただいたご意見の通り、「家庭、学校、地域、民間施設」と変更したい。その他の部分についてご意見をいただきたい。

近藤委員 : 理念の中に「自分らしく学ぶ」が入ると、学校へ行かなければならないとか学習指導要領に記されている内容を学ばなければいけないと受け取られてしまう心配があるのではないか。「はじめに」にも「社会的に自立していくことを目指す必要があります」という大きな目的がある。子どもたちが自分に合った方法で自分らしく生きていくという表現をした方が、子どもにとって心が楽になるのではないかと考える。

荒井座長 : 非常に悩ましい部分だと個人的には感じている。自分らしく学ぶことによって学校というものをイメージしてしまうとの意見であると思う。しかし他方で、「自分らしく」や「自立」という方が重く感じてしまう子どももいるだろうと考えている。「とにかく自立せよ」といった急かしてしまうようなメッセージとして受け止められてしまうと本意ではない。基本コンセプトとなる重要な部分であるので、ぜひ皆様のご意見いただきたい。

今回は、「学びのサポートガイド」ということなので、「自分らしく学ぶ」ということになった背景がある。もしこちらを「社会的な自立」等といった文言とした場合には、記載内容は自立支援やソーシャルスキルトレーニング等、盛り込むべき内容が変わる可能性がある。学校のみならずより広い範囲に主軸を置いた記載にしていくことが必要となる。学ぶことの強迫観念と、自立というものに対する急かされ感をどう捉えていくか、難しい部分

だと個人的に感じている。

西森委員 : 「自分らしく学ぶ」という表現で良いと考える。学びというものが多様になっている現状における学びであるので、広い意味での学びという意味で良いのではないか。

高城委員 : 西森委員と同じ考えである。「学ぶ」には非常に広い概念がある。体験することも学びであり、そのようなスタンスで作成されていると思うので、「学ぶ」の表記で良い。

熊谷委員 : 支援の基本的な理念というところであるので、「はじめに」において社会的自立というものを旨することを明記している。「全ての子どもが自分らしく学ぶ」や、「不登校は問題行動ではない」という認識の中から、自分らしく学ぶ先には、社会の自立を目指していくという部分が基本的な理念に入ってくるべきだと個人的に感じる。1段落目最後の「子供たちの視点に立って支援します」というところに、「社会的な自立を目指します」というような言葉を入れたい。自分らしく学びながら、社会的な自立を目指し支援していくという部分が基本的な姿勢となるのではないか。

池田委員 : 私どもの施設においても、社会的自立を目的として活動している。今回の資料は支援に関して案内するガイドブックであるので、子どもたちに届くようなメッセージにしたい。「自分らしく学ぶ」という表記だと若干ドキドキするような内容になってしまうか。「あなたの自己実現をサポートします」としてはどうか。そのために、自分らしい学び、自己実現のための学びをみんなでサポートしますといったメッセージが伝われば良いのではないか。

宮寄委員 : 学校に通ってる子どもたちを対象にしたものであり、当事者がより良く生きるために学びがあると考えた時には、その先を目指すための学びであることを明記して良いと考える。「社会的な自立を目指す」等の言葉を入れていいのではないか。

前の部分に戻ってしまうが、気になったところがあるのでお願いしたい。「1 不登校に対する理解について」の本文の上から4行目の中に、「みんなと同じように学校に行かないといけないのかな」とか「家庭や学校に迷惑をかけてしまっているのかな」と書かれているが、本当にそうなのかと疑問を感じた。学校に行けずに悩んでいる子どもたちが感じていることは多様であり、不明確なものもある。その中で、この部分が本当に必要なか疑問を感じている。例えば、「学校に行きたいんだけど行けない」とか、「学校に行けないことで勉強がどんどんわからない」といった言葉にしてしまった方がいいのではないか。具体的な文言にしてしまうと、本当にこのように思っているのかと感じてしまう。学校に行けないことで健康も害してるし意欲も下がるし、自信をなくしてしまっているというような言葉に変えた方がよいのではないか。不登校の子どもと接しているとそのように悩んでいると感じる。

荒井座長 : 子どもは多様であり、感じ方も多様である。具体的な例示をせずにシンプルにまとめて

いく案が適切であると感じる。具体性を示した表現にすべきとのことであれば、誤解を生む可能性のある表現は避け、少し表現の仕方を修正していく必要がある。

また、この部分で挿入している絵に関してもネガティブな印象を与えてしまうような可能性がある。さしあたり、上から4行目の「みんなと同じように～」の部分はカットするというのでよいか。例示として書かせていただいた気持ちを持っている方もいるだろうし、そうでない方もいるという点についてご意見いただいた。「このような状況の中で不登校の子どもたちは、悩みや生きづらさを抱えて毎日を過ごしています」という形にできればと考える。心の支援課ではどのように考えるか。

心の支援課： ご意見ありがたい。この部分考えた時点からだいぶ時間が経っており、作成した当時は、次世代サポート課と一緒に当事者の方の声を聞く機会や、保護者の方と話す機会を設ける中で、やはり最も改善したいところとして、不登校は問題行動ではないということを支援に関わる方々に認識してもらいたいと強く考えていた。そのためにもどのような表記が必要か考え具体的な例示を入れた経緯がある。時間も経過しており、具体的な表記は削除して良いと感じている。また、絵の部分についてもネガティブな印象を与えるので、もう一度見直す必要があることを感じている。

荒井座長： それでは、具体的なエピソード表記については、これは事実ではあるが該当しない方々のご意見もあり得るということで削除する方向でよいか。さらに、挿入絵やその表現についてであるが、この場ではイメージ共有が難しいと思うので、心の支援課、県教委にて再検討をお願いしたい。

宮寄委員： 例えば、「学校に行くのがつらいな」や「どうしたらいいのかわからない」のようなものでよいと考える。検討をお願いしたい。

荒井座長： ご意見を踏まえ、全部カットにするのか、「学校に行くのがつらい」とか「どうしたらいいのかな」というような迷いが伝わる文を挿入させていただくかもしれない。ご理解をお願いしたい。

「2支援の基本的な理念」であるが、あくまで学びのサポートガイドであるので、全ての友達が自分らしく学ぶことができるよう支援をするというのが現行案である。もうひとつは、より次の段階を見据えた表現とする考え方である。意見を踏まえ私が考えたものであるが、「全ての子どもたちが自分らしく学び、自分らしく生きることができるよう支援します」というように並列的に文言を加えていくことが考えられる。3つ目のアイディアとしては、「全ての子どもたちが自分らしく生きることができるよう支援します」という表現にすることで、提案いただいた趣旨にかなうものになると考える。

西森委員： これが学びのサポートガイドということで、私は「自分らしく学ぶ」でもいいのではないかと考えたが、最初は「いつも自分らしくいられることができるよう支援します」が良かったと考えた。理由とすれば、追い込まれている不登校の子どもたちの中には、社会的自

立を考える段階ではない子どもがたくさん存在する実情がある。それを考えると、社会的自立を前面に出すのは適切でないと考えた。自立という言葉自体、考え方に難しさがあるとも感じている。関わっている子どもたちと自立について一緒に考える機会があるが、自立ということは1人で何でもできるようになることではないことを伝えている。困った時に誰かにヘルプを出せることとか、緩く人と繋がれること等、そういうことが不登校の子どもたちにとっては自立であることを伝えている。自立ということを先に持ってくるよりは、自分らしく生きていくことの方が大切だと思っている。表記する言葉については、学ぶより生きるの方がいいかもしれないが、並列でもいいと思う。社会的自立を前面に出すのは考えた方がよいと感じる。

近藤委員 : 教育委員会における学校教育の範疇内の支援を対象とした時、その先のことまで考えて繋げていくことも必要だろうと考えた。ただ「学び」というと学校における学びというだけになる恐れがある。このサポートガイドを見た人が学校へ戻り勉強をやっていくことのみが社会へ入っていくことに通ずるものというような誤解を生まないような表現にしたい。自分らしい生き方が求められていることに対しての支援や、自分らしい生き方を築いていくための学びというものが保障されていくような、幅広い視点が入れられればと考える。

もちろん学校の範疇である学びをサポートするが、少しその先のことを見据え、自分らしい生き方の部分を大事にしたい。生きることの望みが減退していくのではなく、生きることの素晴らしさへ思いが繋がっていくようなものとしたい。

小山委員 : 自分らしく生きて、自分らしく学ぶということの2つを入れていただいた方が良いと考える。生きることは自分自身に対して自信を持つことであり、そのきっかけ作りのためには人との関わりも当然あるし、自分のペースに合わせながら新たな学びを加えていく必要があるのではないか。社会的自立は人、物、事と積極的に関わっていくことが欠かせない。3行目の「～支援します」のところを「社会的自立に向かって支援します」というような形になれば良いと考える。

小諸市担当者 : 「はじめに」にある「社会的自立していくことを目指す」という文言は、学校へ戻る・通えるようになることだけが不登校から脱却することではなく、自分のペースで社会的自立に向け歩を進めていくことが大事であることを示していると受け取る。学びには多様性がないと実現できないので、学校での学びだけが勉強することではなく、様々な場所で多様な学びが成立することを読む人に受け止めてもらえるようなものとしたい。そして、自分らしく学び自分らしく生きる前に、自分らしくそこに居ていいよという段階が必要であると考え。周りが全てを受け入れないと、自分らしく学ぶことに繋がらない。「はばたき」が、誰に向けて何を伝えようとするものなのかを大事にしたい。子どもたちが一生懸命に自分の人生を生きようとしていることを伝えたい。

荒井座長 : 様々なご発言をいただいた。この場で確定することは難しいので、検討の方向性のニュ

アンスだけ皆さんにお伝えしたい。後ほど座長として心の支援課や次世代サポート課、県教育委員会と相談、検討していきたいと思う。

構成員の皆さんの思いとして、ここで言う「学び」が、学校に行かなくてはいけないことのみで留まらないものとして共通認識されているかと考える。もう1点は、社会的な自立を急かすような支援は決して適切でないということも共通事項であると考え。学ぶことは生きることであり、生きることは学ぶことであるが、先ずはその子自身を全面的に受け入れていくことが何よりも大事となる。だからこそ、評価をどうすべきかを考え、コミュニケーションを適切に取っていくことが重要になるとの文章を入れている。以上のことから四角枠で囲んだところに関しては、現状の自分らしく学ぶことだけに留めず、自分らしく学ぶニュアンスと自分らしく生きていくというニュアンスを含めた並列関係で記載をしていきたい。広い意味での生きることだけの表記という案もあるかと思うが、あくまでこれは教育委員会という機関が出す学びのサポートであり、この後に記載していく内容として子どもたちの多様な学びをどうしていくかを示したものとなるので、両方を並列的に入れていきたい。

その後の部分に関しては、小山委員、小諸市担当者からもご意見をいただいたが、今の文面だと学ぶということだけになっているので、ありのままの子どもたちを受け入れるという点と、学びを支えていく点、更には生きるということに繋がっていることの3つを踏まえた記載を入れ込んでいきたい。そのような方向で進めたいと考えるのでご了解願いたい。心の支援課を中心に整えていくこととなる。

荒井座長 : 「3不登校児童生徒数および学校外での支援の状況について」の確認をお願いしたい。データを4つほど記載することによって、子どもたちに対する支援が不十分であることの情報共有をはかりたいと考える。ご意見をお願いしたい。

高城委員 : (4)の数値は県の数値なのか全国の数値なのか確認したい。

心の支援課 : 県の数値である。

荒井座長 : 「4多様な学びの機会を保障する仕組みの事例」について確認願いたい。vol1では、今回ご協力いただいた4つの自治体のケースについてイラストを交え示している。内容に関しては先ほどの事例報告の通りであるのご了解いただいているものと認識している。新たに付け加えた点としては、4ページ目の下段になるが、トピックを加えている。今回4自治体の事例以外にも、様々な広がりのある取り組みがあることを理解いただく必要があると考えた。今後の展開も含め入れたものとなる。

西森委員 : 学校に行けない子どもが、学校に行きたくなるような学校にするためにはどうするのか、という視点から見ると、今まで学校でどのような実践があったのかを示す実践例を入れるべきではないか。最初のページにて「不登校未然防止および不登校児童生徒への支援のための行動指針」を表記し紹介しているので、学校でどんな支援を行っているかの事例がな

ければ、今までと変わらないものになってしまうのではないか。「不登校未然防止および不登校児童生徒への支援のための行動指針」では、全ての子どもに自分の居場所がある学校づくりや、一人一人の子どもが生き生きと学ぶ授業づくり、個々に寄り添うこと、子どもの利益を最優先にすることが大前提として示されている。示されているものに対し、学校は今までどうやってきたのかといった実例がないと不十分ではないか。学校外のみでなく学校内での取組実践例も必要だと考える。

荒井座長 : 県教委にも確認したい。「はじめに」にて行動指針の記載があり、学校として不登校の子どもをどうケアしていくかのリーフレットの記載もある。それらの内容を全て網羅する内容とするのか、あるいは vol 1 として、これまで考えてきた学びの仕組みについての記載に留めるものとするのか考える必要がある。西森委員のご意見はもっともであるが、そうするとケース会議の持ち方をどうすべきかや、個別の学校ではどんな取り組みを行っているのかということを実例として入れ込んでいく作業が必要になる。

西森委員 : 「2 支援の基本的な理念」に「学校内外に関わらず」という文言が入っている。また、「全ての大人（学校、家庭、・・・）」と書いてある以上、学校内の事例が無いのは不十分と感じる。

荒井座長 : セクションの立て方としては、「4 多様な学びの機会を保障する仕組みの事例」とは別途に違うセクションが必要となる理解で良いか。学校の中で多様な学びの機会を保障するというケースは4 ページ目の下段に入っているが、西森委員のご意見として、どんな学校内の取り組みがなされているのかを入れ込んだ方が良いという提案である。例えば「4 多様な学びの機会を保障する仕組みの事例」の前に「3」として入るイメージと理解したがいかがか。

近藤委員 : 一人ひとりの子どもの状況、家庭環境、背景も異なり、全てのケースを把握することは難しい。学校では不登校未然防止に向けた取組やシステムがある。しかし、対応しきれない子どもたちを対象に今回の提案があると理解している。それが「はばたき」のねらいの部分であると考え。学校あるいは地域と協働した新たな動きを実例として紹介するのであれば、別のセクションを設けて事例として示すことが良いと考える。そうでないと膨大な量になり時間を要することになってしまう。

発表いただいた4自治体の取組を、他の市町村が参考にして同様の取組を実施しようとしても難しい事情がある。参考にしたり修正改善を行ったりしながら、様々な取組が今後紹介されるようになれば良いと考える。

荒井座長 : 非常に難しい部分である。この「はばたき」を網羅的なものとして共有していきたいとするならば、多くの情報を盛り込んだ数十頁のものとなるだろう。ただ現状認識としては、2頁で示した現在の状況から更に1歩進めるために「4 多様な学びの機会を保障する仕組みの事例」があると考えている。学校内の努力が無駄だという話では全くない。学校内の

事例を入れ込むとした場合は時間的な部分も含め大変である印象を抱く。入れ込んだ方が
良いとの判断になればそれも辞さないがいかがか。

心の支援課 : 現在までの不登校支援の具体例を網羅的に入れ込むとなると、内容を熟考すべき必要
がある。これまでの学校のあり方を見直す一つの視点として4頁下段にトピックを加え
た。学校の中にも特別な居場所作りが必要ではないかということスタート地点として、
新たな取組が広がっていることの情報提供とした。西森委員のご意見を踏まえ、学校の
あり方を含め更に話題を広げられるよう、vol 2では提示できる内容を広げていければ
と考える。

西森委員 : 様々な努力のあることは分かっている。学級担任制ではなくより多くの職員が関わるよ
うにしている等の情報は聞こえてはくるが、なぜ不登校が増加しているのかはこのガイド
を見ただけでは分からないと感じた。vol 2で入れることも可能だと考える。

荒井座長 : 学校という空間自体を問い直す取組が県内外で行われており、トピックの部分はもっと
豊かに書ける部分である。また今回の4つの事例は自治体が頑張った例であるので、学校
レベルでどんなことができるのかという視点は確かに重要だと考える。vol 2等でトピッ
クの部分を更に広げたり、教科担任制の課題や成果、あるいは異年齢学級等に入れたとき
に何が起ころのか等、不登校に限らず多様な学びのあり方を多くの方に理解していただく
ような内容を盛り込むことができると考える。

西森委員 : 4つの自治体の実践例と同等の情報量にて学校内での実践例があれば良いかなと考える。
記載されているものは全て不登校になってしまったことに対する対症療法的な事例であ
る。大事なものは、不登校にならないような学校作りのシステムを考えていくだと考える。
学校というもののシステムを考えていく必要があることを入れ込まないと次に繋がって
いかないと考える。子どもに対してのベクトルなので、学校に対するベクトルが入ってい
ない点においては、実践例があると良いと感じる。

荒井座長 : いわゆる個別の学校の個別のクラスの中での取組もあれば、例えば医療分野との連携や、
福祉分野との連携、生活保護や子どもの貧困といったケースにおける連動をどうするかと
いった部分まで範囲が広がる。そうすると不登校児童生徒の学びのサポートガイドではな
くなくなってしまう。

vol 1としては今回の形で収めさせていただき、いただいたご意見については重要なこ
とであるので、心の支援課、他の課も含め受け止めていただくという形でよいか。

近藤委員 : 荒井座長にまとめていただいたが、学校教育制度、日本の制度そのものの問題に関わっ
てしまうので、まとめていただいたような形で良いと考える。ただトピックに関しお願い
したい。県内でも、例えば校長室であれば行ける子どもがいる。こんな事例もあるといっ
た紹介程度であれば入れ込むことができると考える。

熊谷委員 : 「3不登校児童生徒数及び～」の(1)の表についてお願いしたい。この表に全体の児童生徒の減少数を載せてはどうか。不登校数が増えている反面、児童生徒総数は減少していることを示すことで、割合として大きく増加している現状の把握につながる。

小山委員 : 自治体の報告では、コーディネーターの活躍により地域資源や人に結びつけ支援された事例を教えていただいた。子どもたちが抱える課題は複雑多岐にわたる。支援にかかる取組をしてもなかなか改善されていかないことが当然あるかと思うが、こんな取組で支援につながった、子どもたちにこんな力がついた、こんな変化があった、という実践事例を示していただくことは非常に大事である。紹介いただいた実践を参考にし、自分たちの地域に繋げられるものを拾い出しながら、マンパワーを活用していくという方向が示唆されたと考える。

トピックにて他県の取組を紹介しているが、他県ではなくぜひ県内の取組をお願いしたい。東御市では中学のスライドの中に、不登校支援関係者の時間を設定し情報共有や支援の検討の時間としている。新たな取り組みを模索しながらやっている。ぜひそのような取組を紹介してもらいたいと考える。

荒井座長 : 申し送りとさせていただき、次年度のvol2以降の検討事項にしたい。学校内のケース、小山委員からいただいたご意見に関する点、更には生活保護や子どもの貧困等との関連のみならず、フリースクール、居場所等々に対する公費補助のあり方、オンライン不登校等、様々な部分がある。これらについて今回扱ってしまうと4つの自治体の取組にブレが生じてしまう恐れがある。今年度はこのケースのみとして加筆修正してまとめる方向で進めたい。ご理解をお願いしたい。いただいたご意見については心の支援課にて受けとめていただく。

高野委員 : 今回4つの自治体の取組を拝見し、コーディネーターの位置づけや役割について示唆いただいた。学校内においては、長野県では13、14年前より登校支援コーディネーターの事業が始まり、特別支援のコーディネーターから特化した形で登校支援コーディネーターが位置づいたと記憶している。依然として難しい課題がある中、コーディネーターによる新たな支援や連携が更に広がっていくことは学校現場の願いである。また学校としては、冒頭1ページに記載されている「不登校への対応の手引き(令和3年改訂版)」を年度当初大事に確認し共通理解をはかっている。

この「はばたき」では、学校だけでなく行政や地域、家庭といった全ての大人の、子どもたちの自立を応援しているよという温かいメッセージが、子どもたちに伝わるものとなっている。多くのものを望むのではなく、今回はコーディネーターの位置づけと、「5学校による不登校児童生徒の学習支援や社会的自立に向けた支援の在り方」の部分の2つが子どもたちの大きな応援歌になるだろう。

荒井座長 : 5頁に移らせていただく。5～7頁に及ぶ3頁にわたり個別具体的な各学校の子ども

あり方に対するケアについて記載させていただいた。当然のことながら記載したもの以外にもあり得るし、もっと詳しく知りたい等々あるかと思うが、vol 1としてはご提示する記載で考えている。不十分だという部分があるかもしれないが、初めの一步として、今回は具体的な国のケースを含め県内のケースを入れさせていただいた。「サポートガイド」であるので、学校のトップリーダーである校長が判断する際のサポートになればなという趣旨にて構成されたものとしている。ご意見等いかがか。

西森委員 : 2点お願いしたい。(1)の基本的な考え方の中に、「懸命の努力」という言葉がある。この言葉は適切ではないと考える。「懸命の努力」と聞くと、勉強しなくてはいけない、学校に行かなきゃいけないと感じさせてしまうように思う。何もしない時間が必要な時もあるし、学校のことを考えずに回避的な場としてゲームばかりする時もある。その姿を「懸命の努力」として学校が判断していくのかを考えると、この言葉は適切でないように感じる。

もう1点は、「5学校による不登校児童生徒の学習支援や社会的自立に向けた支援の在り方」との記載であるのに、その内容が全て出席扱いのケースとなっている。この出席扱いのケースを削り、スクールソーシャルワーカー等と連携したケースを入れるのであれば良いと思う。しかし出席扱いを前面に出すのであれば、その出席扱いにすることの意味を明確に記載する必要があると考える。「出席扱い」がもつ現実的な意味をはっきりと書いた方がよい。出席ゼロでも卒業はできる。評定には関係なく評定自体は出席していてもアスタリスクになっている等、本人も親も周囲の人たちもわかっていない実情がある。出席扱いにすることは、子どもにとってどんな利益となるのかを明記する必要があるのではないか。知ってもらうことが必要だと考える。

荒井座長 : 「懸命の努力」を「不登校児童生徒の学び」と修正しても強い言葉となってしまうか。

西森委員 : 広い意味での多様な学びという「学び」であれば良いと考える。懸命に努力しなさいというようなイメージがついてくる言葉は適切でない。

荒井座長 : ニュアンスとして1人歩きする可能性があるので、「不登校児童生徒の学び」という言葉に変更させていただく。2点目に関しては、当初はこのタイトルを「5出席扱いについて」と考えた。しかしそうすると議論が矮小化してしまい、小さな議論だけを書いてくことになってしまうので、今回のvol 1のタイトルとしては広めに設定した経緯がある。よって、コミュニケーションをとることが必要であることを打ち出した上で、あくまでも学校長向けのメッセージとしている。評定権をもつ学校長の判断による出席扱いをどうするか切実な課題とされている現状を鑑み、その部分の手当てをしていくということで今回記載している。具体的な書きぶり等あればご提案いただきたいと思います。他にこの部分に関しご意見いかがか。

近藤委員 : 出席扱いにするかしないかということが大きな課題になっていることは理解している。

今回提示されることにより、出席扱いにする動きが今後広まっていくだろうと推測する。学校だけが学びの場ではないということが出されている現状において大切なのは、学校は校外の支援者と共通理解を深め共に共通理解して子どもたちを支援していこうとする姿勢である。真の趣旨に迫れるようにしたい。

宮寄委員 : 出席扱いも大事であるが、学校外の施設で本人が何を学んだのかという評価の部分について、システム化し見える化することが重要だと考える。そのことが学びにつながるのではないかと。もちろん出席数が多いと中学から高校に行く際の判断材料にはなるが、どこで何を学んだのかが自分の所に評価として戻ってくるような学びでなければ、その子にとっての学びにならない。学校内ではテストや教師により評価ができるが、学校外で何を学んでいるのかを適確に把握するシステムづくりが必要である。出席扱いよりも評価の中身を考えていくことの方が大切であると感じている。

荒井座長 : とても共感する部分である。もはや出席扱いをどうするかは問題ではない状態となっており、現実には先行していることをご理解いただけたらと思う。本丸は学びというものをどう評価するのかというところにある。次に控えている課題は、人がどこで何を学んだかを学校が評価することの意味を考えるべきところまで現実には進行している。コロナ禍において、感染不安の児童生徒は登校しなくとも出席扱いにはならないが、不登校の児童生徒は出席扱いになるといった不可解なねじれ現象が出てきている。いただいた意見は大事にしたい。県としても受けとめていただきたい部分である。

他方で、私たちが考える以上に、各学校では出席扱いをするかどうか、出席扱いにしてよいのかどうか不安に感じている管理職が多い現状がある。その一歩として、ケースを示し出席扱いに関し参考にしてもらうべく提示している。ご理解いただきたい。事例を入れることに関してはご了解いただいたと認識してよいか。

荒井座長 : 最後に8ページ、9ページである。多くの方々にご覧いただく可能性があるためURLとQRコードを示した。他の情報を入れた方がよいというご意見があるかと思うが、さしあたり国の通知や県のサイトを記載させていただいている。vol2以降は更なる改善が見込まれると考えている。

もっと情報を盛り込むべきだとか、あるいは検討が不十分だという部分があるかと思うが、前回の会議でご意見いただいた項目立てにて構成し、委託事業で協力いただいた自治体のケースを入れ込むということを主眼に作成している。本日いただいた意見については、vol2の作成に向け心の支援課にて検討をお願いしたい。改訂に向けての作業を並行して進めていただければと考える。

今後の展開について心の支援課より説明をお願いしたい。

心の支援課より ガイドの周知・扱いについて説明。

荒井座長 : 様々なネットワークを駆使して周知していくという確認であった。心の支援課としては、

発出時期の目安をどのように考えているか。

心の支援課 : 本日分の修正、今後の修正を含めると、今年度内もしくは、来年度当初と考える。
可能な限り今年度内の発出を目指したい。

荒井座長 : 様々なご意見とともに各発言より熱意をいただきありがたい限りであった。このガイドは生まれたてのものであるので、より良きガイド作成のために皆さんのお力添えをお願いしたい。もうひと踏ん張り年度内に確認いただく内容等あるかと思うので、積極的にご意見等をお願いしたい。少しでも良いものを作っていきたいと考えている。今年度第3回目の懇談会であったが、貴重な時間をご提供いただき感謝である。事務局より今後のことについて確認をお願いしたい。

心の支援課 : vol11について様々なご意見をいただいたので、改めて修正案を事務局等で考えた後、委員の皆様にお送りし確認いただきたいと考えている。正案に向けもうワンステップ取り組みたいと思うので、ご協力願いたい。

更に今後、来年度以降に向けての課題についてのご意見をいただいたので vol12 の作成を目指していきたいと考えている。また様々なご意見をお願いしたい。

本日いただいた意見を踏まえ修正を行い、委員の皆様には最終案を提案させていただく。また併せて、本日の会議にて発言いただいた内容について、ホームページに掲載予定である。議事録についてもお送りし確認いただくのでご承知いただきたい。

以上をもち閉会とさせていただきます。本日はありがとうございました。